

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2018

「豊かに生きる ～大学は知の宝庫～」

第6回 11/30 (金) 13:30～15:00 報告

スウェーデンの学校と子どもの幸せ

講師 横山真理 (本学講師)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

横山真理先生は本学に勤務する前に、長年関市において特別支援教育および音楽教育を専門にしている中学校の教員でした。子どもが小さい頃に、育児休暇とご主人の海外赴任が重なったことを機に、スウェーデンに滞在する機会がありました。子どもの通っていた小学校と中学校を出発点として、スウェーデンの公共教育を研究することができました。本日の講演はその成果発表にもあたりました。

始めに、「遠くて近い国」スウェーデンの紹介がありました。スウェーデン人が初めて日本を訪れた時の旅行記は1647年に発表され、その後も交流がありました。明治時代になって間もない1868年に「修好通算航海条約」の締結により外交が正常化され、1871年に岩倉使節団がスウェーデンを訪問しました。北欧に位置するスウェーデンは日本より若干広い反面、人口は日本の13分の1に過ぎません。GDPなどの面でも日本ははるかに大きいですが、様々な社会指標においてスウェーデンは日本をしのいでいます。例えば、国連の世界幸福度調査においてスウェーデンは9位になっているのに対して日本は54位です。(国民性から日本人は控えめに答えたとも思われる、というお断りもありました。) 新生児の死亡率では両国は共にベスト3に入っていますが、自殺死亡率では日本の方が高いです。日本の方が貧困率は高く、その問題への取り組みは世界平均より下回っているというデータがあるのに対して、スウェーデンは貧困の撲滅にかなり成功しています。日本では大学教育は男女ともにかなり大切だとされているのに対して、スウェーデンでは大学教育にこだわらず、職業訓練なども同じように大切にされています。

スウェーデン人は住まいと自然環境へのこだわりが高く、生活の質を重要視しています。家族同士で過ごすことが多いけれど、18歳で自立する人も多いです。赤ちゃん連れの家族は交通機関などでいろいろな特典もあります。全体的に暮らしやすい国です。

子どもが育つ環境についての説明もありました。スウェーデンは高齢化社会となっていますが、子どもへの投資は大切にされています。また、1970年以降、スウェーデンは難民の受け入れに対して人道的に考えてきたため、中東からの難民の波がヨーロッパを打ち寄せた2015年前後、外国出身の住民は大変多くなりました。しかし、スウェーデンの学校教育への社会投資が先進国の中でも大きく、学校の中でもスウェーデン語を習うための予備教育が重要となっています。横山先生の子どものような教室に通い、世界各地の子どもと一緒に過ごすことができました。1975年に幼保一元化をし、先進的な幼児教育を実施しています。就学前クラスは小学校の中に設置されています。5学年までの小学校と4年間の中学校ののち、高等学校や公立成人学校、国民高等学校、大学など選択肢もあり、生徒は自分の興味と能力に合った教育軌道をたどれます。

小学校一年生の一日は給食後に終わりますが、すべての子どもは早く帰ります。中学校でも、9時ごろから3時ごろまでの短い一日です。空き時間があれば、校外に出て買い物したりすることは許されます。給食は宗教などの縛りを配慮します。清掃の仕事は新しい移

民の社会進出に大切な役割を果たしていますので、児童生徒は日本と違ってお掃除をしません。しかし、スウェーデンの教育者は日本の行動教育（お掃除、ごあいさつ、道徳など）をうらやましく見ているそうです。学校はどこでも20名程度の少人数教育を実施しており、児童生徒同士と教員のコミュニケーションを大切にしています。教科書や消耗品は学校が提供します。しかし、学校のイベントはほとんどなく、多くの学校には運動場などありません。小さな体育館がニーズに間に合わないときは、学外の施設や自然環境を活かして教育しています。

結論として、自由度の高いスウェーデンの学校では子どもたちは自分に合った課程をたどって社会人を目指せますので幸せです。日本の学校にとって参考になるところは多く、これからもさらに研究する価値が大いにあります。

講座の受講者にとって驚きの多い講演内容でしたが、筆者がカナダで受けた教育に似ているところも多く、懐かしく聞くことができました。

【講座の様子】

